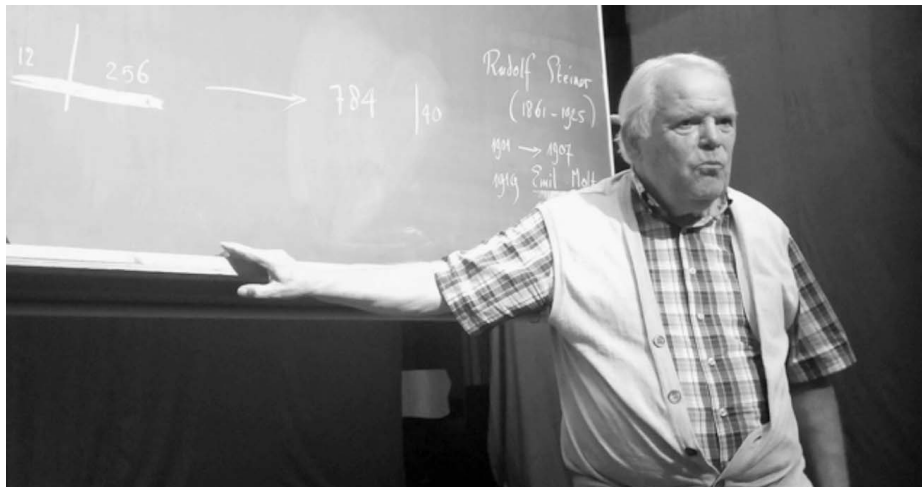


クリストフ・ヴィーヘルトさん講演会 《シュタイナー教育の100年》レポート

広報委員会
入谷聡（2年生保護者）

2018年9月21日、「シュタイナー教育の100年」と題する講演会が開催された。講師のクリストフ・ヴィーヘルト（Christof Wiechert）さんは、オランダ出身で長くシュタイナー教育の教員養成に携わる「教師オブ教師」的な人（こう書くといかめしいし、真剣な顔の写真しかないけれど、ジョークいっぱい言うし笑顔がかわいい）。講演メモをもとに、この日学んだことを紹介してみたい。



（1）シュタイナー学校が生まれた100年前のこと

世界初のシュタイナー学校（自由ヴァルドルフ学校）が生まれた、1919年。この年、第1次世界大戦が終結し、革命／終戦／ハイパーインフレといった社会の混乱の中で、シュタイナー教育が芽生えたという背景がある。

最初のシュタイナー学校は、エミール・モルト（Emil Molt）というドイツ人実業家が、私財を投じて古いレストランを買い上げ、そこに教員になる人を集めて実験学校を立ち上げたのが発祥だという。「教員になる人」と言っても、エミールが最初に集めてきた教員候補生12人の中に「教職経験がある人」は、ゼロ。この教員候補生たちに、ルドルフ・シュタイナーが「1日2時間

の講座＋実習」をたった2週間やっただけで、学校をスタートしたという。最初の8クラス256人の子どもたちの中には、戦争の影響で「学校」というものを知らない子どもも多く、遊び場と勘違いして全く学ぶ意欲がない子どももいた。教員は教員で、2人揃えば喧嘩ばかりして授業が進まない……という、まさに「混沌」の学校だ。

ところが、なぜかこの学校はとてもうまく行き、その後5年間で3倍近くの規模に成長した。1928年までの10年間に各国へ広がり、第2次世界大戦を挟んで1970年代に爆発的な広がりを見せて、今では60ヶ国1250校に及ぶネットワークを形成している。ゼロから始まった「混沌」のシュタイナー教育のどこが、それほどまで人々を惹きつけたのだろうか。

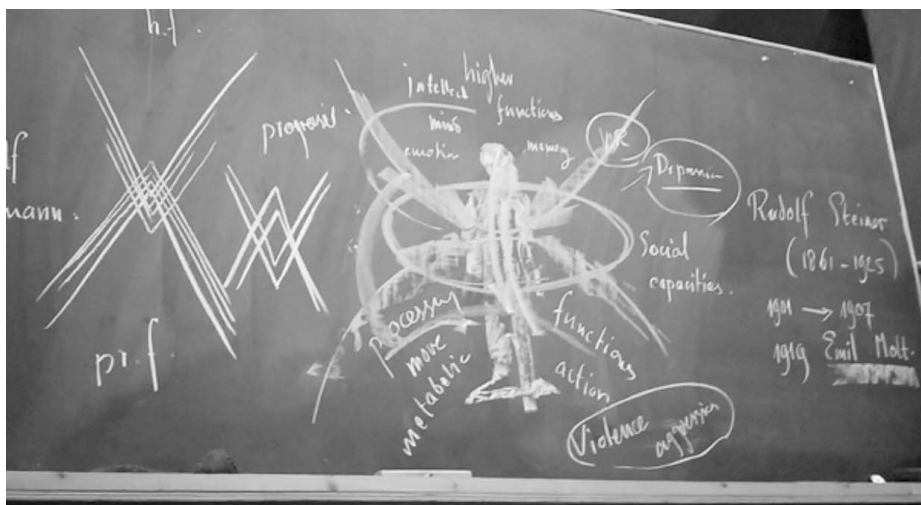
(2) 教育のタスクと、「芸術」を手段とする教育の意味

ここからが、この日の講演のキモ。ヴィーヘルトさんは、教育の「タスク」を次のように説明する：「高次機能（Higher function）」と「プロセス的機能（Processing function）」を統合することで、「社会的能力（Social capacities）」を育むこと。

- ・「高次」の機能：アイデア／知性（intellect）／思考（mind）など、頭を使う事柄
- ・「プロセス的」機能：行動（move, activity）／代謝（metabolism）など、身体を使う事柄
- ・「社会的能力」：感覚（feeling）／感情（emotion）／熱意（enthusiasm）といった要素

シュタイナー教育のアプローチが「社会的能力」を育んだ一例として紹介されたのは、オランダ・デルフト生まれの若き発明家、ボイヤン・スラットさんのエピソードだ。（ヴィーヘルトさんは講演中で名前を言っていなかったが、背景的におそらくこの人がそう。）彼は1994年生まれの24歳、The Ocean Cleanupという会社のCEOとして、海洋のプラスチックごみを回収する事業を展開している。

※YouTubeで「ボイヤン・スラット」を検索すると、2012年に”TEDxDelft”で講演した時の映像が観られます。当時18歳！



ヴィーヘルトさんは、彼が14歳の時のエピソードを紹介してくれた。海のプラスチックごみを浄化するアイデアを、ある時テレビに出演して話したところ、共演した大学教授から「君はまだまだ小さいから、まずは勉強して大学に来たまえ」的なあしらいを受けた（勉強しろ、というのは「高次」機能を高めればできるという考え）。でも、ボイアンはめげなかった。そのアイデアを少しずつ行動に移し（「行動」はプロセス的機能）、高校卒業後は大学に進んで海洋学を専攻し、熱意を失わずに、ついには14歳当時からのアイデアを大きな事業として開花させている。

頭／知性／高次機能と、体／プロセス的機能を噛み合わせるために、シュタイナー教育は**手段として、「芸術」を用いる**。芸術は教育のゴールではなく、あくまで「手段（instrument）」だとヴィーヘルトさんは説明する。ちなみにこのことは、筆者が一保護者としても実感している、シュタイナー学校の特にユニークな側面だ。一般的な教科学習の代わりに、音楽・絵画・手仕事・そして演劇といった授業が、学びの過程になる。子どもたちは何ごとにも、芸術を通じて学んでいく。シュタイナー教育は決して「芸術家養成」のプログラムではなく、例えばオーストラリアではシュタイナー学校卒業生の40%近くが、科学や医学の領域を進路として選ぶそうだ。手を動かすことや芸術を通じて学ぶことが知性の向上を導くという事実は、近年科学的にも解明されつつあるらしい。幼稚園児がお皿を洗ったりパンを焼いたり、小学校3年生で家を建てたりといった活動が、「高次機能とプロセス的機能の統合（social capacityの醸成）」を促し、「意味のある行動」をとることが何よりも「熱意（enthusiasm）」を育む。

一方で、近年テクノロジーの進歩とともに、小さい子の教育現場にタブレット端末やVR（バーチャルリアリティ、仮想現実）の利用が広まっている。しかし、タブレットやVRに早くから浸ってしまうと、高次機能ばかりが先行してプロセス的機能の方が未発達になり、発達がアンバランスになってしまう。その歪みは、「暴力性、攻撃性」や「うつ（depression）」という悪い形で露呈する。精神病の原因も、高次機能とプロセス的機能のバランスにあると説明されるから、外で遊んだり、手を動かす活動をすることが、健全な成長につながる。ヴィーヘルトさんの本拠オランダでも、政府が主導で教育現場へのタブレット端末導入が進んでいるらしいが、この流れにはプロセス的機能の発達を阻害するネガティブな側面も大きく、代わりに1日2時間の外遊びをさせる等で、バランスを取っているそうだ。

他にも、クラス全体で取り組むクラス演劇やオーケストラなどの〈プロジェクト〉を通じて形成される「連帯感（togetherness）」「友情（friendlines）」といった要素も見逃せない。大人数のクラスメイトが一つになって挑むプロジェクトを繰返し経験することで、プラスのムードが育まれ、「学びの共有（share learning）」を促進し、「健全（healthy）」な教育風景を創り出す。

高次機能とプロセス的機能という核心に何度も戻りながら、さまざまな角度から100年続いたシュタイナー教育の潮流を掘り下げる、非常に分かりやすい講演だった。子どもの教育だけではなく、社会人の「仕事を通じた学び」にも直結する話だと感じた。知識偏重にならず手を動かすこと。熱意を持つこと。学びを共有すること。創造的な混沌の大切さ。"healthyな風景" という感覚。これから先出会う、さまざまな教育アプローチの「ねらい」を考えながら、シュタイナー教育の理解をより深めていきたいと思う。